

# 「元気いっぱい・笑顔いっぱい」



特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

## 「子どもが伸びる接し方5」

### 1 見つめる（絶対的な安心基地になる）

子どもはうれしいときや困ったとき、必ず自分を見守ってくれる人、信頼を寄せている人を期待して振り返る。子どもが自分の方を見てきたら、目を合わせて見つめ返す。それだけで子どもは安心感を得られる。子どもの頑張る姿を見逃さず、認めているというメッセージを目で送る。この積み重ねが、子どもの自信につながる。

### 2 触れる（スキンシップは子どもの心の栄養）

子どもが望ましい行動をして、その行動を強化（定着）したいときは、ポン、と肩を軽くタッチする。多動・衝動性の特性がある子どもには、ポポーンと、素早く2回タッチすることで気持ちが伝わりやすくなる。頭を上からなでられると圧迫感を覚える子どもがいるので、触れたりなでたりするときは、手を横から差し出す。

### 3 話し掛ける（認めていることを直接伝える）

子どもは評価されたように育つので、叱られてばかりいると、「私はダメなんだ」と、自己肯定感が低下する。そうすると、活動への意欲がなくなり、注意を引くために問題を起こす。「今のままで大丈夫、それでいいよ」とメッセージを送り続ける。

家庭環境に課題のある子どもたちは、月曜日の朝は気持ちが安定しない。

「おはよう」「昨日どこに行った？」と朝一番に声を掛け、子どもが答えたら「そうかそうか」と反応する。それだけで、子どもは落ち着ける。



### 4 話を聴く（聴いてくれる人に、子どもは信頼を寄せる）

子どもは困っているから行動するが、その言動は本音と必ずしも一致しない。聴くことは一石三鳥（①子どもの本音を聞き出せる、②子どもの存在を肯定する、③子どもとよい関係を築ける）である。支援の答えは、子どもがもっている。

### 5 ほめる（何が評価されているかを分かるように伝える）

大声で「やったあー」と声を上げてハイタッチしたり、小声で「やったね」とつぶやいたりすることも「ほめる」である。子どもの実態や発達段階に合わせてほめる。よい行動が定着するために、子どもに身に付けてほしい行動（望ましい行動）がしっかり伝わるようにほめる。

ポイントは、（1）から（5）までの対応を「笑顔」で行うことです。口を一文字に結んだまま、口角を持ち上げて微笑んでも、子どもには伝わりません。子どもの脳は、歯を見せて笑うことで「笑み」を認知します。

一日も早くマスクを外して、子どもに笑顔で接したいものです。



## とれたて直送便



### 第2弾「人は乾杯の数だけ幸せになれる」（西洋の諺）



第一弾 「子どもは（ ）の数だけ幸せになれる」

笑顔、ありがとう、成功体験 or 失敗体験、分かった・できた、ほめられた回数、素敵な先生との出会い、支えてくれる人、話を聴いてくれる人……。

第2弾 「保護者は（ ）の数だけ幸せになれる」

あなたなら（ ）にどんな言葉を入れますか。こっそり教えてください。